



# 置戸の農作物 ～ハッカ

北見地方が日本一の生産地

▶ハッカの分水器  
ハッカは収穫後蒸留して出荷するが、分水器はその加工設備の一部で、液体となった油と水を分離して回収する器。(町郷土資料館所蔵資料)



置戸でのハッカ栽培は、土居常呂（常元）に入植した福島団体が、明治43年に訓子府から種根を取り寄せて始めたのが最初といわれています。ハッカは、気象条件が適していただけでなく、一駄（60kg積）で、2～3haの収穫物を運搬できたことから、交通の不便な置戸の開拓作物として魅力あふれる作物でした。

ハッカ景気もあって、耕作面積は急速に広がっていき、昭和9年にはホクレンが野付牛村（北見市）にハッカ工場を開業。多年の念願であった北見ハッカの自主販売体制が確立されました。やがて日中戦争に突入すると、国の外貨獲得の手段としてハッカ栽培が大いに奨励され、昭和14年には全道の作付が19,941haと最高を記録し、うち網走管内は19,113haを作付して、全道の96%を生産。「北見ハッカ」の名を欲しいままにしました。

大正末期から全盛期にかけての置戸の耕作記録は、大正14年－86ha、昭和4年－201ha、昭和9年－314ha、昭和13年－589ha、と増加し、昭和13年統計では、ハッカが作目別収入のトップとな

り全体農作物収入の3分の1を占めています。しかし、太平洋戦争への突入によって食糧増産に力が注がれ、戦争中は激減。ハッカ畑はえん麦などの飼料作物に転換され、遊休化した蒸留装置は、松葉油製造に転用されるなどの状態で終戦を迎えました。

戦後も一時期を除いて北見ハッカは全国の52%から100%の生産をあげていました。特に、昭和29年のハッカ価格の高騰と、優良品種「万葉」の普及によって生産は急速に回復しましたが、昭和46年からハッカの貿易自由化と、翌年からの石油合成法による合成メントールが大量生産されるようになって、昭和50年にはほとんど置戸では耕作者を見ることなくなりました。

北見といえばハッカ、ハッカといえば北見といわれるようになったのは、日本唯一のハッカ工場があったためですが、同工場も昭和58年に閉鎖され、今は北見ハッカ記念館として名残りを留めるのみとなりました。

(参照：置戸町史、置戸町史上巻、置戸町史下巻)



## 田舎暮らしに楽しみたい皆さん

農村生活体験生 じゅうじん 地遊人 岩渕 芳枝さん

今年度ただ一人の「地遊人」として置戸町へ移住してきた岩渕さん。岩手県奥州市の出身で、大学卒業後は、農業関連の書籍を扱う出版社に勤務していました。「仕事で北海道内の農家を一軒ずつ訪ねて回っていました。その時の置戸町の印象がとても良かったんです。農作業に興味がありま



したし、鈴木純一さん（秋田）からの勧めもあり思い切って申し込みました」と応募動機について語ります。これから挑戦したいことについては「まずは農作業を頑張りたいです。イモの収穫機に乗るのが夢です。家庭菜園も始めました。また、多くの人との出会いや交流も楽しみです。よろしくお願いします」と笑顔。ドライブが趣味で「道東やオホーツクには観光名所がたくさんあるのでワクワクしています。美味しそうな食べ物もたくさんありますし」と新たな生活のスタートに楽しみが尽きない岩渕さんです。